

①【長篠・設楽原の戦い】序章：野田城の戦い



住所 新城市豊島字本城地内		
城の説明	見どころ:話どころ	聞きどころ
戦いの場所	奥三河の野田城	菅沼定盈VS武田信玄
武田信玄の西上作戦	武田信玄の勝利	城将菅沼定盈身柄拘束
交戦戦力	武田信玄 30,000人	菅沼定盈 500人
戦いの逸話	武田信玄の狙撃伝説	定盈の家臣鳥居三左衛門が狙撃



* 元亀元年(1572)冬、三方ヶ原の戦いで徳川家康を撃破した武田信玄は、宇利峠(新城市と静岡県境)を越えて奥三河の、徳川家康家臣の菅沼定盈の守る野田城を囲んだ。山家三方衆の野田菅沼家は、武田軍の奥三河侵攻後も徳川氏に従っていた。年を越して正月、囲まれた野田城は、小さな城ながら中々落ちなかった。その城内より、夜毎に美しい笛の音が聞こえてきた、笛の名人村松芳休の吹く笛の音であった。武田信玄は、その夜も闇に紛れて城に近づき、その音色に聞き入った。城内からこの様子を察知した、鳥居三左衛門は、十三匁の火縄銃で信玄を狙撃した。たちまち武田軍に衝撃が走った。

・落城2月10日 ・武田信玄死去4月12日

(死因は、この鉄砲説と病氣説の2つがある)

その火縄銃が新城市の宗堅寺に伝わる【信玄砲】である。徳川家康から、野田城主の菅沼定盈に贈られたと伝わるもので、台座やカラクリの部分は失われて銃身のみ、銃身の上には、「十三匁」と読み取れ銃身長105cm口径20ミリ。設楽原歴史資料館で展示され見る事が出来る。

野田城内には、武田軍が金堀人で水を断つたとされる大きな井戸と信玄狙撃の場所の看板と、近くの【法性寺】には、狙撃された場所が伝わります。城主菅沼定盈は、信玄に捕らえられ武田軍により開城されてしまいます。

野田城の御城印

武田信玄の狙撃の伝説が伝わる野田城

信玄怒涛の西上作戦

新城七名城

野田城

令和 年 月 日



野田城 (市史跡)

所在地 / 愛知県新城市 鳥羽字本城
 時期 / 永正 13 年(1516) - 天正 18 年(1590)
 城主 / 菅沼定則 - 定村 - 定盈

概要 / 菅沼定則によって永正 13 年(1516)に築城された。この時期、東三河では多くの城が築かれたため、今川氏による影響があった可能性がある。その縄張りは連郭式とよばれ、舌状台地という地形をうまく利用した縄張りを持っている。
 武田信玄がその生涯で行った最後の城攻めの舞台ともなった。主な遺構として曲輪や土塁、空堀、虎口、土橋、井戸などがある。

・野田城の見学: 散策は、国道151号線に沿った所に在り、平城でコンパクトの縄張りの為、容易に行くことができます。特に夏は森の中で涼しく、多くの史跡も見ごたえがありお勧めのお城です。武田軍が戦いに際して、甲州の金堀人により井戸の水を断つたと伝わる【井戸】を始め、武田信玄を狙撃した場所、70m程離れた法性寺の境内にある、撃たれた場所などを見ることが出来ます。ただし、やぶ蚊が多いため殺虫剤の携帯をお勧め致します。



野田城跡

この城は、永正5年(1508)に築城されたと伝えられる。菅沼定則・菅沼定村・菅沼定盈等がここを居城とした。

城郭は南北に長く、北より三の丸・二の丸・本丸と続くいわゆる連郭式の山城である。東西両側は谷になっており、当時は自然の川をせき止めて堀を形成していた。

戦国時代、今川・武田・徳川などによって幾度も争奪戦が繰り返され、天正 18 年定盈が関東へ移封されるまで続いた。

昭和56年3月1日
新城市教育委員会

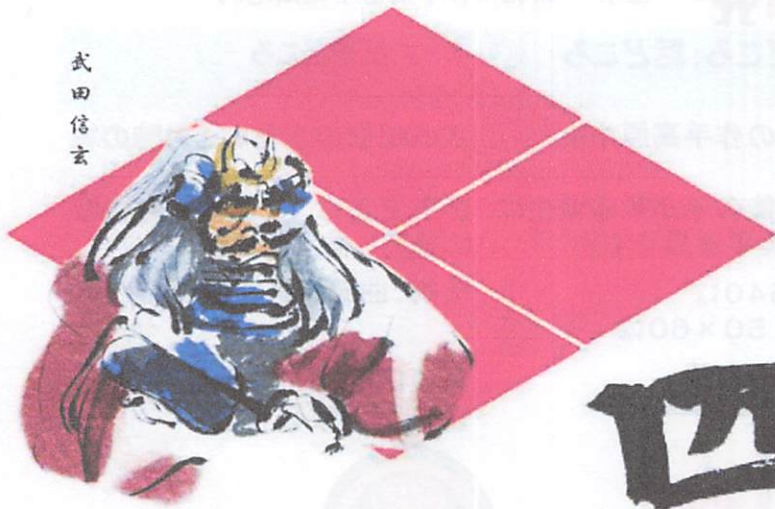


信玄公、狙撃場所

軍の善に誘われた武田信玄を、付近より火縄銃にて狙撃した。その説は銃身だけが法性寺史資料館に展示してある。

新城市教育委員会

武田信玄



野田城の戦い

四百五十年

武田信玄

最後の城攻め

上洛断念の地

令和五年(二〇二三年)

菅沼定盛



村松芳休



ちさと郷土研究会



市HP(野田城跡)

この時家康は、対岸の旗頭山まで救援に来ていますが、2万の武田軍の勢力に野田城救出を諦めます。

② 亀山城の解説



住所 新城市作手清岳字城山地内

城の説明	見どころ:話どころ	聞きどころ
場所 新城市作手清岳	奥三河の作手高原中央	武田氏側の古宮城と対時の城
天正元年(1574)に武田氏から徳川氏に再転属した	奥平貞能の子が長篠城主になった奥平貞昌です。	奥平貞昌は、長篠城の籠城戦に勝利し信昌と改名。
永応31年(1424)奥平貞俊築城	標高 540 ^m 規模 150×60 ^m	遺構 曲輪:堀:土塁:井戸
戦いの逸話	久保城の密談	密談内容は、武田信玄亡き後の奥平家の存続
		

* 亀山城は、応永31年(1424)奥平貞俊により作手高原のほぼ中央に築城された。貞俊は、現在の群馬県よりこの地に移り住んで川尻城を築いた後、亀山城を築城して転城した。その子孫は、この地で支配者としての地位を確立し、後に【山家三方衆】と呼ばれる有力地方豪族となった。16世紀になると今川氏、松平氏、織田氏と言った武将の配下を転々としながら天正3年(1573)に徳川方となって、長篠城主となった奥平貞昌(信昌)は、長篠の戦いの功績により、江戸時代末期まで歴史に名を残すこととなった。亀山城の立地場所は、東西三河へ至る交通の要にあり、亀山城を中心にして、周辺には、いくつかの武田氏との関係の深い山城が集中していて元亀年間には、北北東に1^{km}離れた場所に武田氏によって【古宮城】が、北川正面の山頂には、奥平氏の築城とされ一夜城とも称される【文殊山城】、さらに尾根続きの東方に【本城山砦】と別名のある武田側の築いたとされる、【賽の神城】が立地している。この亀山城の近くには、奥平一族が居城としたとされる【石橋城】が作手道の駅の前にある。

